

雪の白峰

小島烏水

青空文庫

アルプスに Alpine Glow (山の栄光) という名詞がある、沈む
 日が山の陰へ落ちて、眼にも見えなくなり、谷の隅々隈々に幻の
 光が、夢のように彷徨^{さまよ}い、また消えようとするとき、二、三分
 の間、雪の高嶺に、鮮やかな光が這^はって、山の三角的^{てっぺん}天^て辺^{ぺん}が火
 で洗うように耀^{かがや}く、山は自然の心臓から滴^たれたかと思う純鮮血色
 で一杯に染まる、まことに山の光栄は落日である、さればラスキ
 ンも『近世画家論』第二巻に、渚へ寄する泡^{ほう}沫^{まつ}と、アルプス山
 頂の雪とは、海と山とを描いて、死活の岐^{わか}れるところだというよ
 うな意味で書いてある、落日より億万の光線を吸収して、その一
 本一本に磨きをかけるのは、山の雪である、アルプスばかりでは

ない『甲斐国志』にも、白峰^{しらね}の夕照は、八景の一なりとある、山の雪は烈しい圧迫のために、空気泡を含むことが少ないから、下界の雪のように、純白ではない、しかも三分の白色を失って、三分の氷藍色を加え、透明の微小結晶を作って、空気の中に、澄徹に沈んでいる、群山の中で、コバルト色の山が、空と一つに融ければとて、雪の一角は、判然^{はつきり}と浮び上る、碧水の底から、一片の石英が光るように。

^{あおざ}蒼醒めて、純桔梗色に澄みかえる冬の富士を、武蔵野平原か

ら眺めた人は、甲府平原またはその附近の高台地から白峰の三山が、天外に碧い空を抜いて、^{かつきり}劃然と、白銀の玉座を高く据えたのを見て、その冴え冴えと振り翳^{かざ}す白無垢衣^{しろむくえ}の、^{しわ}皺の折れ方まで

が、わけもなく魂を織り込もうとするのに魅せられるであろう、水を打ったように肅^しんみりとした街道の樹も顫^{ふる}え、田の面の水も、慄^{ぞっ}然として震えるような気がするであろう。

自分は甲斐精進^{しょうじ}湖に遊んで、その近傍の山から、冬の白峰を見たことを、鮮やかに記憶している、空線の上に、夢みる巨人は、下界の水平線上、青春の国の炎の中で、夢を見ている自分と、向き合った、彼の夢には冷たけれども光があった、自分の夢は、彼に吸収されていつしか化石のような自分を融かしてしまった、自分は無意識に古人の言ったことを繰り返えす、「北に遠ざかりて雪白き山あり」もうそれでよい、ただ白峰でよい。

雪によって名を得たものに、飛騨山脈の大蓮華山、また白馬岳

があるし、蝶ヶ岳もある、しかし虚空に匂う白蓮華も、翅粉谷のみお水脈より長く曳く白蝶も、天馬空を行かず、止まって山の肌に刻印する白馬も、ことごと悉く収めて、白峰の二字に在る、「北に遠ざかりて（何等の神秘）雪白き山あり（何等の高潔）」即ち白峰である、何という透き通った感じのする山であろう、この外に美しい名もなければ、涼しい名もない、やさしい名もなければ、威厳ある名もない。

自分は昨年えんざん塩山の停車場で、白ペンキ塗の広告板に、一の宮郷銘酒「白嶺」と読んで、これは「雪の白酒」ではあるまいか、さぞ芳烈な味がすることであろうと思った、また他で製糸所の看板に、白嶺社とあるのを見て、この社の糸の光には、天雪の輝き

があらう、衣に織つたらばさぞ、と考えたことがある。

白峰は幾峰にも分れている、が殊に北の三山、北岳、あい たけ間の岳、のうとり

農鳥山は高さにおいて、姿態において、白峰全山脈を代表している、その中でも農鳥山の名を忘れてはならぬ、一体甲府辺の人たちは、春の田植えや、また秋の麦蒔きなどを、「農をする」といつている、この二期には、山の雪が消え残つたり、また積もり初めるときで、綿の入った厚い峰の白妙衣が、しろたえ綻び出したり、また縫い初められる、そのとき鳥の形が、農鳥山の頂上より、直下、少しも左右に偏することなく、胸壁の上に印せられるので、この鳥形が見え初めると、農にかかるから、農鳥山の名を獲たともいう、殊に晩春から初夏へかけての鳥形は、実に分明なるものであ

るといふ、「農鳥」といふのは、鶏の義であるそうだが、事実残雪は、鶏とは見えない、無風流な農夫は、自分に説明して、シャモの雄^{おどり}鳥の立っているようで、段々雪が融けると、尾が消え、腹が^{むし}撈られ、耒^{すき}のような形をして、消えてしまうと語った、白い鳥は消えても、注意して見ると、岩壁^い巖かめしい^{あかい}赭色の農鳥は、いつ、いかなる時でも、おそらく山が存在する限りは、見えているだろう。(あるいは農鳥といふのは、農鳥山の麓近い沢に、雪の消えた跡へ、黒く出る岩で、卵を三つも持って、現われるといふ、言い伝えもあるそうだ。)

山の雪が動物の形態となって消え残ることは、何か因縁話があるのかは知らぬが、殊に中央日本の山に多いようである、自分の

知った限りでも、前記の蝶ヶ岳、白馬、大蓮華の外に、先ず東海道から見た富士山の農男（馬琴の『羈旅漫録』巻の一、北斎の『富嶽百景』第三編に、その図が出ている、北斎のを茲に透き写す、これで見ると、蝶や農鳥は、雪がその形をするのだが、農男は、雪に輪を取られた赭岩が、人物の格好に見えるらしい）は、名高いものであるが、甲府方面からは、富士の「豆蒔小僧」というのが見える、八十八夜を過ぎて、豆を蒔く頃になると、あの辺の農夫は、額に小手を翳して、この小僧を仰ぐものだそうな、それは小僧が二人連れ立って、一人は笠を冠り、一人は片手を挙げて、豆を蒔く形をしているので、同じく雪に輪廓を取られた岩が、そういう形に見えるのである。殊に越後には最も多い、妙高山の

「農牛」は、甲斐鳳凰山（実は地藏岳の方にあるので、牛は首を北に向け、尾の方を少し高くしている、甲府から見て、一間位の大きさに見えるそうである）と同じであるし、焼山の蝙蝠こうもりは、いといがわ糸魚川方面からは、分明に見えるというし、米山に鯉があらわれると、魚が漁とれないという諺もある、頸城郡くびきの黒姫山の寝牛、同じく白鳥山の鳥など、雪の国だけあって、山と雪の関係は、何か神話の材料にでもなりそうである。友人辻本工学士に拠ると信濃越中の国境に聳えている祖父じいヶ岳は、「種蒔まきき爺やさん」がざる箆へらを持った具合に現われるので、山腹雪解の頃、偃松はいまつが先ずその形ひろがに蔓はつて、出るのではないかという話である、偃松の仲間入は最もおもしろい。

農鳥山の鳥形の美うつくわしいことを、自分に説いてくれたのは、前に引合に出した友人N君である、N君は早稲田文科の出身で、創作に俊秀の才を抱きながら、今は暫く峡中で書を講ずるの人となっている、自分はN君の通信から、ここに二通を抜く、殊に手紙に添えて、送られたN君のスケッチは、すこぶ頗る緻密なもので、小さい雪の斑点まで、洩もらされなかったのであるという。

白峰より彼鳥かのを奪わば、白峰は形骸のみとならんとまで、この頃は飽かず、眺め居おりそうろう候、……白峰の霊を具体せるものは、誠にこの靈鳥の形に御座候、前山も何もあつたものにあらず、東南富士と相對して、群山より超越せる彼巨人の額

に、何ものの覆うものなく、露出せる鳥の姿、スカイラインよりは、僅に一尺も低かるべきか、農鳥の農の字が平野的に、^{わずか}氣に入らず、また決して鶏とは見えず、首長きところよりも^{まじ}紛う方なき水鳥に候、埴輪の遺品に同じ形の鳥と見給うべし、水掻きまであり、高さここより見て、一間も候べきか、甲府附近を、最も觀望宜しき場処と存候。

誠に晩春より初夏へかけ（ここの赤裸々となるは、夏期わずかの間に候）最も歴々と仰がるべく、夏にても、形は明確に、白雪山を埋むる今にても、これを恋人とせる小生の目には、同じ雪に蔽われながらも、この鳥形のみは粗き^{おお}山の膚（元より白色）の中に、滑らかに平に浮び出で居候が、認められ候。

白峰の壯觀は、空氣澄水の如き朝、明らかにて、正午よりは、
 淡き水蒸氣に遮られ候、但し日光の工合にて、かえって鳥だ
 けは、朝よりも明瞭に仰がれ候（側は陰に入るより）、駒ヶ
 岳の孤峭は、槍ヶ岳を忍ばせ、木食仙の裸形の如く、雪
 の斑は、宛然肋骨と頷かれ候、八ヶ岳も、少し郊外に出づ
 れば、頭を現わすべく、茅岳、金岳より、近き山々、皆冬枯
 の薄紫にて、淡き三色版そのまま、御阪山脈の方向は富士山
 なくんば見るに足らず、富士の雪は夕陽に映るとき、最も美
 しく候、ここはなお雪がふらず、白峰風は大抵一日おき位に、
 午後より夕まで、または夕より十二時頃まで、凄まじき音を
 たて、この夜坤軸を砕く大雪崩の、岩角より火花を迸発

する深山の景色を忍び居候。(十二月十八日甲府より)

別紙白峰の拙画は、今年初秋―四十年において、最も白峰を明瞭に仰ぎ得し日の午前写生せしものを、忠実に写し直せしものに御座候、赭色なるは雲なき頃とて、皺谷の赤膚を露出するもの、甚だ妙ならず候えども、スカイラインと共に、山の皺は、いかにも興多きため、忠実に岐脈をも余さざりしつもりに候、中央に鳥形の赤裸なるを御覧あるべく、これが埴輪の鳥形に候なり、これには脚なくして、二股の尾あるを見給うべきも、この図は、雪なきときの切崖の露出にて、雪少しにても降れば、この尾は消えて、脚を生じ、例の埴輪の鳥の如き形となるに候、いずれにせよ、鶏ならずして、立派な

水鳥、小生の大好きなスワン（伝説に最も縁多き）の形に仰がれ候、図中、鳥形の左なるへ、形の山は、もと白峰つづきの山かと存ぜしに、曇日などに白峰見えずとも、この山明かなるにて、別峰なることを知り候、今日この山に、非常の降雪ありしように候、雪降りては、農鳥より右は真白なれど、左は縦谷のみ白く仰がれ、膚は容易に、白くならぬように候。

これより右、地藏鳳凰を越えて、槍ヶ岳の駒ヶ岳と、峭立しては、絶景の極、駒と並べて見て、白峰は益す立派さを増すますま

に候、農牛、農爺、蝶、白馬、これらが信甲駿の空に聳えて、相応ずる姿、鏡花の『高野聖』に、妖女が馬腹をくぐる時の文句に「周囲の山々は矗すくすく々と嘴を揃え、頭を擡もたげて、この

月下の光景を、朧^{おぼ}ろ朧^{のぞ}ろと覗き込んだ」とやらありしを思い
出で、何やら山に霊ありて、相語るが如く、身慄^{ふる}いられ申候、
昨夜は明月凄じきばかりなりしに、九時頃より一人、後^{うしろ}の天
守台に上り、夜霧の彼方に朧^かろなる彼の白色魔を眺め、氣の
まよいか、白鳥のあたりだけは、鮮やかなるような心地いた
し候。(十二月二十九日)

その後もN君は、数葉のスケッチを送られた、N君が初めて物
の本から読んで知った、農鳥の形を見つけ出して校堂に説くに至っ
てから、初めは信ぜざりし鳥形が、誰の目にも立派に分るよう
なり、七、八歳の小童から、中学生まで、往来を通るにも、西の

大壁を仰向いて、足を緩めるようになった、初めはくさしていた大人も、南向きの白鳥の、優しく、長く、延べた頸の、曲線の美しさに、恍惚とするようになったという。

しかし農鳥山は、白峰の雪を代表したものではない、農鳥山は三山の中、最も南に寄っているから、雪は最も少量である、この神秘的な白鳥が消えても、間の岳あいだけは白銀の条すじを入れている、間の岳は、登って見て解ったのであるが、全山裸出の懸崖と、絶壁とより成り、その上に一髪 of 山稜が北へと走っているので、焼刃の乱れたように、白くギラギラと輝いている、更に北岳は奥の奥だけあって山の胸にかけて、一里以上もある、凝れる氷を幾筋か白く引いている、自分は北方の白馬岳で、氷河的雪の壮観を説くのは、

南の印度^{インド}で、ジャングル的藪の美を説くのと同じく、当然と思つてゐる、しかしながら偉なる哉^{かな}、南方の雪^{はし}！ 黒潮奔れる太平洋の海風を受けて、しかもラスキンのいわゆる、アルプスの魔女が紡^{つむ}げる、千古の糸にも似た雪の白い山！ 讃嘆せよ、讃嘆せよ、太平洋岸の表日本には、東に富士あり、西に我白峰がある。

N君からは——ちようど亜米利加人^{アメリカ}が、ルーズベルトの一挙一動を、電報で知らせてよこすように、白峰山脈の一陰一晴を知らせて来る、「二昨日朝、初めて西山一帯に降雪あり、今晚半時ばかり、日出前——日出——日出後の山と、その空との、色彩の變化を観察す」(十一月十七日)とある、そうかと思うと「灰汁^{あく}のような色の雪雲、日に夜叉神^{やしゃじん}(峠の名)のあたりより、鳳凰、

地蔵より縞目を作^なして立ち昇り、白峰を見ざること久し」(十二月十七日)と渴^{かつ}えた情を愬^{うった}えて来る、「甲州は今雪の王国に御座候、四囲の山々、皆雪白、地蔵鳳凰の兀^{こつりつ}立、殊に興味あり、また雪ある山々の、相互の陰翳、頗る面白く候、東の方の山々の中、夕日の加減にて、或山のみ常は凡々たるが、真紅に、鮮やかに浮き立つことあり、珍しく人目を惹^ひくさま、何かの象徴の如くに候」(二月十九日)と物思わせることもある、真夏の夕暮に、下のようなハガキも、舞い込んだ。「極暑九十七度九分、山々に未だ雪あるに呆れ候、一昨夕、稀なる夕映、望遠鏡にて西山一帯を眺めいたるところ、駒ヶ岳の絶^{ぜってん}巔、地蔵の頭、間の岳、農鳥の絶頂なる、各三角測量標を、歴々と発見いたし候」(七月十八日)、こ

の時の感じは、何だか自分が観て、N君に知らせているような気がした。

秋も末になった、白峰の山色を想っていると、N君から、馬上の旅客を描いた端書が来た。

この月に入りては、甲斐が根風一万尺余の絶巔より吹きなぐるに、目もあかれず、月の末あたりよりは、山男の鹿の片股、兎、猪の肉など、時々遙々とひさぎに参るべき由、さあらば、熊の皮の胴服などに、久しく無沙汰の芝居気取など致して見ばやと笑い居候、天長節より時雨つづき、雨やや上りて、雲がなき日の雪ある山の眺め、都人の想像及ばざるところに候、

地蔵、鳳凰の淡き練絹纏ねりぎぬいし姿は、さもあらばあれ、白峰
 甲斐駒の諸峰は、更に山の膚を見ず、ただ峻谷の雪かすかな
 る、臙銀の色をなして、鉛色なる空より浮き出で巨大なる蛇
 の舌閃ひらめいて、空に躍れる如し、何等のミレージ、何等のミラ
 クル、今朝はやや晴れ、白峰満山の白雪、朝日に映じて瑪めの
 瑙うに金を含む、群山黙として黒く下に参す、富士も大なる
 白色魔の如く、鈍き空に懸れり、兄けいを招じて驚嘆の叫び承わ
 り度候、山を見ては、兄を思う、昨日今日の壮觀黙もくって居ら
 ず、かくは

冬近き山家や屋根の石の数 (十一月六日)

これを読まされると、自分はもう堪^{たま}らなくなる、ふと目を挙げ
て「北に遠ざかりて雪白き山あり……」……、往きたいなあと、
こぶし
拳に力を入れて、机をトンと叩いた。

青空文庫情報

底本：「山岳紀行文集 日本アルプス」岩波文庫、岩波書店

1992（平成4）年7月16日第1版発行

1994（平成6）年5月16日第5刷発行

底本の親本：「小島烏水全集」全14巻、大修館書店

1979（昭和54）年9月～1987（昭和62）年9月

入力：大野晋

校正：地田尚

1999年11月25日公開

2005年12月11日修正

青空文庫作成ファイル..

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪の白峰

小島烏水

2022年 5月 3日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>